

## 幼き日のかねごと：『伊勢物語』第二十三段・「くらべこし」の解釈

後藤，康文  
宮崎大学教育学部講師

<https://doi.org/10.15017/11909>

---

出版情報：語文研究. 71, pp.32-39, 1991-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 幼き日のかねごと

——『伊勢物語』第二十三段・「くらべこし」の解釈——

後藤康文

## 一

むかし、あなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいであ遊びけるを、大人になりければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ、親のあはずれども聞かでないありける。さて、このとなりの男のもとより、かくなむ。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざる

まに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべ

き

など言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。

〔角川文庫〕

右は、『伊勢物語』全篇口でもおそらくはもつともよく知られてい

るであろう章段すなわち第二十三段の、いわば冒頭第一部にあたる本文である。本稿の主眼は、この話の中に見える女の返歌の初句「くらべこし」という表現がここにおいて担わされた意味を再吟味することにある。

もっとも、これを含めた女の歌の上句の解釈に關していえば、近代の諸注はほとんど例外なく一致した見解を示しているのであって、今さら再考を促すべき余地はないかに見える。そこでまずは、繁を厭わずそれらを列挙するところからはじめることとする。

・わらはどち、いづれか長きとくらべ來し、振分髪も肩を過ぎて、垂るゝほどになりぬ。  
〔講義〕・語釋

・あなたとよく長さを比べた私の髪も、もう肩を越す程になりました。  
〔活釋〕・口釋

・よくあの頃は、二人で比べあつた振分け髪も、今はふさふさと長く肩より下に垂れる様になりました。  
〔新釈〕・語釋

・幼い時あなたと共に、どちらが長いと比べて遊んできました、私の振分髪も、今はもう肩を過ぎて、垂れるほどになりましたけれど  
〔大成〕・意釋

・互ニ比ベテキタ私ノ短イ振分髪モ、今ハノビテ、肩ヲ過ギテ垂レル程ニナリマシタ。  
〔口釋〕・釋

・どちらが長いかとあなたとくらべくらべしてきた私の振分け髪も、もう肩をすぎるほどのびてしまいました  
〔精講〕・通釈

・あなたのそれと長さを較べてきましたわたしの振分髪は、今は肩を越しました。  
〔評釈〕・釈

・お互いに長さを比べ合って来た振分髪。  
〔大系〕・頭注

・あなたと私とどちらが長いかと比べてきた振分髪も、肩をすぎたのびました。  
〔校註〕・頭注

・あなたと井筒の側でどちらが長いか比べっこして来た振分髪も、すっかり伸びて肩をこすほどになりました。

〔狩野尾・中田〕新解・口訳

・（あなたも御立派に成人なされたのですね、私も）昔よく、どちらの方が長いかくらべてきた振分け髪も、もう肩を過ぎてし

まいすっかり長くなりました。  
〔講談社文庫〕・和歌訳

・あなたとどちらが長いかとくらべあってきましたわたくしの振分髪も、肩を過ぎるほど伸びてしまいました。  
〔全集〕・口語訳

・あなたと長さをくらべてきました私の振分髪も、もはや肩を過ぎてしまいました。  
〔森本〕全釈・通解

・あなたとどちらが長いかと比べあってきました私の振分髪も、すでに肩を越すほどのびてしまいました。  
〔鑑賞〕・口訳

・あなたと長さを比べ合ってきた振分髪も、今は肩を越えてしまいました  
〔集成〕・頭注

・おたがいに比べてきたわたくしのふりわけ髪も肩をすぎました。  
〔全対訳〕・口語訳

・あなたとどちらが長いか、ずっとくらべっこをしていたおかげ髪も今では肩の辺りを過ぎてずっと長くなってしまいました。  
〔全訳注〕・現代語訳

・あなたとその長さをくらべてきた私の振り分け髪も肩より長くなりました。  
〔角川文庫〕・現代語訳

•あなたと長さを比べあった私の振分髪も、肩を過ぎるほどになりました。  
(中野・春田『全釈』・通釈)

•あなたと比べ合ってきた私の振分け髪も、肩を過ぎて、伸びました。  
(『講説』・歌意)

•あなたと心を通わせ比べ合ってきた私のおカッパも、肩を過ぎるようにになりました。あなたでなくて、一体誰が、あなたと親しく比べ合ったこの髪を上げてよいものですか。  
(『全評釈』・訳)

•あなたとくらべっこをしてきた私の振分髪も肩を過ぎるほど長くなりました。  
(『旺文社文庫』・現代語訳)

ここに知られるとおり、件の「くらべこし」は今日、主人公の男と女が幼少のころからお互いのふりわけ髪の長さを比べあって来たことを述べた表現と解されて決着しているのである。

けれども、この〈定解〉にはおおいに疑問が残る。なぜなら、「井筒にかけ」た「まろがたけ」がどうやらそれを「過ぎ」たらしいと歌いかけた男の贈歌に対して、女がわたしの「ふりわけ髪も」すでに「肩」を「過ぎ」たと応える時、どうしてそれが「あなたとその長さを比べてきた私の振り分け髪」(『角川文庫』)であることとさることわらねばならなかったのか、まったくその必然性を見いだしたいからである。換言すれば、この一組の贈答歌の論理は、近代の諸注が「くらべこし」に与えた〈定解〉の介人を峻拒しているよう

に思われるのである。

## 二

だから、長い『伊勢物語』注釈史の流れの中で、如上の解釈とは異なるいくつかの説が唱えられているのも思えば道理といえよう。そこでここでは、それらについて瞥見しておくことにしたい。

まずは、『和歌知頭集』の見解で、「男のもとよりしては、君があらそひしたけはわれぞまさるらんと、むかしのたはぶれをうしなはで詠みたれば、女のかへしに、わがいまだ幼くてあらそひてくらべし髪は、われぞまさりたるらんと、たはぶれかへしたるなり」(九州大学蔵・宝暦十二年写本)というもの。この説は、男と女の間で幼時「たけくらべ」と「髪くらべ」とでもいうべき「あらそひ」がそれぞれ別個に行なわれたと想定し、男の贈歌を「髪くらべ」における「たはぶれ」の勝利宣言、女の返歌を「髪くらべ」における「たはぶれかへし」の勝利宣言と理解するのである。もっとも、この「想定」自体は、今日なおその命脈を保っているものであって(最近のものでは『全評釈』、完全な「異説」というわけではない)。

次いで、契沖の『勢語臆断』が提唱する「くらべこしとは、わが肩にくらぶるなり。(中略)女はまたも井のもとに立ち出でねば、ただわが肩にくらべきつる髪もや肩に過ぎて長くなりぬれば、君ならでは誰か手触れてこの髪をば上げんとなり」(『契沖全集』)という考え方があつた。これは「くらべこし」の引き受ける対象を男女双方の髪の長さとは見なさない点で、明らかな異説といえる。

そして、明治期以降の注釈書の中では、折口信夫の『ノート編』が「これは想像になるが」と断わったうえで、「髪を分けるのが、こっちが長くなった、こっちが短くなった、と、自分の髪を比べているのではないか。つむじを中心にして分けると、どっちかへ多くなるので、それが『くらべ』ことではないか。つまりこの考えは、『くらべこし』は振分け髪に関する語だとすることだ」と述べているのを、従来とはまったく別の発想に基づくまさに異色の見解として位置づけてみる事ができるのである。

さて、これらのうち『知頭集』の場合はともかく、あとの二者はいずれも先の〈定解〉に不審を覚え、そこから新たな解釈の可能性を模索した挙句それぞれに独自の見解をはじき出してきているのであるが、その結果をみると、ともにかえて袋小路に迷い込んでしまったとの感を抱かざるをえない。それでも『臆断』の考え方は、男の方が「井筒」に自分の背丈を「かけ」て来たのに対応させて、女は自らの「肩」に自分の髪の長さを「くらべ」て来たのだと解するのであるから、それなりに筋は通っており、筆者の見地からすれば、例の〈定解〉よりはよほどマシである。一方、『ノート編』の考え方はというと、これはいわば、病をなんとか正しく治療しようと試みて余計にこじらせてしまったケースであり、残念ながら〈珍説〉と評するほかはないように思われる。いずれにせよ、女がその「肩」を基準に「ふりわけ髪」の長さを測り比べていたという状況も、女がその「ふりわけ髪」の左右の長さを比較していたという状況も、万一そうした事実があったにせよ、先の〈定解〉の場合と同様、当面の贈答歌の論理の中に組み込まれるべき要素たる必然性をなんら持ちあわせてはいないのである。

ところで、荷田春満の『伊勢物語童子問』は、また一風変わった説を展開していて注意されるので、このついでに引用しておく。

問、井筒にかけしとある詞心得がたし、諸抄にこの詞の釈なし。まろがたけをくらべたることをかけしといひたるか。

答、よろしき問なり。これも予疑ふ所なり。返歌にくらべこしふりわけ髪とあれば、男の歌にも髪のことなきをいかがと疑はれしを、真名には、懸志麻呂之長生爾計良志諸妹不見間爾とあれば、もし、長の字はかみと読むこと、古來常のことなれば、髪の借訓の字かと思はるるなり。過ぎにけらしとはなく、生爾計良志とあれば、まさしく髪のことなるべきか。

〔荷田全集〕

もちろん、右に述べられている内容そのものには到底しがえるものではないけれども、ここにおいて春満が、「返歌にくらべこしふりわけ髪とあれば、男の歌にも髪のことなきをいかが」と、当面の贈答歌の整合性を問題にしてこれに拘わっている点は重要である。『童子問』では、その視点がたまたま誤った方向へと流れてしまっているのであるが、「くらべこし」の解釈は、もう一度そのところへ立ち戻って検討されねばならないのではなからうか。

### 三

「贈答歌の整合性」などと述べたが、一般的にいって、歌のやりとりが行なわれる場合、答歌（返歌）は贈歌の内容・表現等を直ち

に承け、それに緊密に連繫して形成されるはずであり、贈歌にピタリと呼応し無駄なく詠み出されていなければなるまい。つまり、その一組の歌の關係は、一筋の論理において純粹に貫かれているのが望ましく、その間にこれを弛緩させるような夾雜物の介入する余地は本来あるべきではないのである。

そこで、繰り返す。幼馴染みの恋人に自分の背丈が井筒を越えたとよこしてきた男の歌に対し、相愛の女は、私の髪も肩を越すほどに伸びたと返しているのである。要するに、男の歌も女の歌も、ともに自分たちがすでに一人前になっており、結婚の機はついに到来したのだという事実を歡喜をもって伝えあっているのであって、女の返歌には、「待ってました」といわんばかりのはやる心情が満ち溢れている。それなのに、「くらべこし（ふりわけ髪）」を「あなたと私の長さを比べてきた（振り分け髪）」と解していたのでは、男の歌に素直に繋がらず、いかにもつきが悪い。つまり、ここで突如「弛緩」が生じてくるのであって、元来よく響きあっていたかゝるべきこの贈答のうえに水を差す結果となってしまう、まるでぶち毀してある。従来の〈定解〉が示す理解は、「くらべこし」という言葉を、当面の贈答歌にとって前述の「夾雜物」すなわち余計な要素以外のなものでもない不当な位置に追いやってしまったのである。なお、念のためにつけ加えておくならば、幼い子供がお互いの髪の長さを競いあって戯れたというようなことが、当時実際にあったか否かを問うことも、この際、まったく無用な穿鑿にしかならない。

さて、これまでの解釈が正鵠を得たものでないとするならば、問題の「くらべこし」は、いったいどのような機能を担った表現として捉え直すべきなのであろうか。「夾雜物」からの正当な復権は、い

かにして果たされるべきなのであろうか。

そのためにはまず、この贈答歌の「論理」を正しく把握しておくなければなるまいが、私見によれば、当面の贈答は、次に図表化して示すような整然とした「論理」をもって構成されているものと考えられるのである。

詠主	対象	基準	結婚の条件
男	たけ	井筒	これを「過ぎ」ること
女	髪	肩	これを「過ぎ」ること

すなわち、男にとっては、その背丈が基準と定めた「井筒」を「過ぎ」ることが、また、女にとっては、その髪の毛が基準と定めた自分の「肩」を「過ぎ」ることが、ふたりそれぞれに誓いあった結婚の条件だったわけであり、このふたつの条件がともに満たされたことの確認は、男と女がめでたく夫婦となるべき始発点に到達した現実を意味したのである。そして、その背後には、ふたりがまだごく幼少の時に「井のもとにいでて遊」ぶ中で、無心にしかし真摯に交わしたひとつの約束、いわば「幼き日のかねごと」がはっきりとその姿を現わすことになる。――僕の背丈がこの井筒を越えたら僕は必ずおまえと結婚するからね。それじゃあわたしは、この短いふりわけ髪が肩を過ぎるまで伸びたら、あなたと結婚することに決めたわ。きつとよ。

それでは、この「幼き日のかねごと」を湛えた二首の和歌を、問題の言葉「くらべこし」は結局どのように連結させていることにな

るのであろうか。

#### 四

「いったい、なにとなにとを」「くらべ」てきたのか。——それは、ふたりがお互いのふりわけ髪の長さを「くらべ」あったのでもなく、女が自分の肩にその髪の長さを「くらべ」たのでもなく、ましてや、女がふりわけ髪の左右の長さを「くらべ」たのでもあるまい。「くらべ」てきたものは、男の背丈が井筒を越して伸びるに到る早さと女の髪が肩を越して伸びるに到る早さと、ではなかったのだろうか。あの無邪気な約束をして以来、ふたりは日毎に「井のもとにいでは、——あなたの背丈は昨日よりどのくらい伸びたかしら。そういうおまえの髪の方はどうだい——、とおのがじし自分たちで決めた「結婚の条件」を満たす日がやってくる早さを競った、とみるのである。

昔、田舎暮らしをしていた人の子供たち——ひと組の男児と女児——が、井戸のまわりに出て仲良く遊び戯れていたものだったけれど、時が来てふたりとも〈大人〉になっちゃったので、それからというものの、男も、また女の方も、互いに顔を合わせるのを気恥ずかしく感じて会うこともなく過ごしていた。だが、心の中では、男も女も、遠い日に交わしあったふたりだけのほほえましい約束を忘れることなく、互にあの人こそわが終生の伴侶と思いつけていたのである。だから女は、年ごろを迎えた娘のために親が持ち込むほかの男との結婚話をいっこう聞き入れようとしなくて、ひたすら幼馴染みの隣家の男が求婚してくれるのを待って暮らした。そして、

ついにその日がやってきたのである。

現実的に考えるならば、両者はこの時すでに〈大人〉になっていたわけであるから、今ごろ「僕の背丈もどうやらあの井筒の高さを越えたらしい」などと詠んでくるのはおかしい。が、そこにはいうまでもなく例の「幼き日のかねごと」が、ふたりだけの知る密やかな感傷を乗せた纏綿たる響きとなって底流しているのであって、男の歌は、現実の時間と空間とを遥かに遊離した甘美なメルヒェンの世界を基盤に成り立っているのである。男は幼時の誓いに被けて、自らの「結婚の条件」はずでに調っているのだと女に告知し、求婚してきたのだ。

そこで、女の歌である。「くらべこしふりわけ髪」——あなたの背丈が井筒を過ぎるのとどちらが早いかと競ってきた私のふりわけ髪——あのころはまだ短かったその髪も、今はもうお約束の肩を過ぎて十分に長くなりました。私の方の「結婚の条件」ももう満たされているわ。あなた以外の誰の奥さんになれちゃっておっしゃるの、と男の歌にピッタリと呼応して詠まれているこの一首。「くらべこし」を従前どおりに解した場合との、答歌としての緊密度をあらためて「くらべ」てみていただきたい。右に述べたような意味に受けとることによつてはじめて、この言葉の必然性は保証されるに到るのである。だからこそ女は、「ふりわけ髪も」と詠んでいるのではなかったか。

この歌のやりとりにおいて、ふたりは互いの変わらぬ愛情と結婚の意志とを確認し、なお「言ひ言ひて」めでたく夢を実現させることができたのであった。

以上、『伊勢物語』第二十三段の二首目の歌に見える「くらべこし」の意味をめぐって、ささやかな私見を述べた。本稿が考察の対象としたものは、『伊勢物語』全文のうちのわずか五文字に過ぎないし、また、その当否はもとより諸賢の御判断にお任せするほかはないのであるが、それについても痛感させられることは、この物語が日本古典文学史に残るあらゆる作品の中でもっとも広く読まれている傑作のひとつであり、かつ、数多くの注釈書が今日まで間断なく著わされてきているにもかかわらず、注釈上の問題点は依然山積しているという事実である。

たとえば、石田穰二氏は「従来の注釈は、作品の性格の解明という問題に全く無力であったと言うほかない。それだけでなく、まったく初歩的に、言葉の読解という面でも、解明に困難ないわゆる難語、難文の存在にも事欠かない。簡素な作品であるだけに、逆に、徹底した注釈の密度の濃さが要求されていると言わねばならぬであろう」と述べ（『角川文庫』解説）、片桐洋一氏は「伊勢物語はきわめて小さな、きわめて親しみやすい物語であるために、専門研究者以外の多くの人がその読解を世に問うている。しかし率直にいった伊勢物語をどう把握するかという姿勢が一定していないために、旧来の諸説を前提にしてその場限りの注を付しているものが多いのが残念である。（中略）思うに、今後しばらくは、作家は作家なりに、国語学者は国語学者なりに、自らの立場に徹した注釈を加えることこそ肝要であって、それらの総括は、もう少し後になってからとい

うことになるのではないかと思うのである」と説く（別冊国文学『新・古典文学研究必携』平2、學燈社）。そもそも、『伊勢物語』は全篇をトータルに把握しその文芸性をすつきり論ずることをややすと許さない作品のように、筆者などには感じられるのであるが、それはともかく、研究のもっとも基本的な次元に属する本文の正確な解説に衆知の傾注されることがやはり当面の急務ではないのだろうか。いまだ定解のない箇所については甲論乙駁の果てにこれをよく止揚すべきであろうし、すでに定解を得ていると考えられる部分についても疑わしきは積極的に疑ってみるべきなのであって、そうして一步一步解釈上の曇りを取り除いてゆくことが、なによりも先決だと思われるのである。華麗なる作品論は、そのうえでじめて展開可能となるはずであろう。

## 注

本稿において参照した明治期以降の主な注釈書は以下のとおりである。なお、論中で引用したものについては、傍線部をもってその略称とした。

今泉定介『伊勢物語講義』（明26、誠之堂書店）／鎌田正憲『考証伊勢物語詳解』（大8、南北社出版部）／小林栄子『伊勢物語活釋』（大15、大同館書店）／高崎正秀『伊勢物語新釈』（昭5、正文館書店）／著作集第八巻『古典評釈』昭46、桜楓社）／新井無二郎『評釈伊勢物語大成』（昭6、代々木書店）／佐佐木弘綱・信綱『口釋伊勢物語』（昭15、人文書院）／竹野長次『改訂伊勢物語新講』（昭23、大学書林）／池田亀鑑『伊勢物語精講』（昭30、學燈社）／窪田空穂『伊勢物語評釈』（昭30、東京堂出版）／大津有一『伊勢物語の新しい解釈』（昭30、至文堂）／大津有一・築島裕『日本古典文学大系』伊勢物語（昭32、岩波書店）／松尾聡・永井和子『校註伊勢物語』（昭43、笠間書院）／折口信夫全集・ノート編第十三巻（昭45、中央公論社）



／片桐洋一『校注古典叢書 伊勢物語』(昭46、明治書院)／狩野尾義衛・中田武司『伊勢物語新解』(昭46、白帝社)／森野宗明『講談社文庫 伊勢物語』(昭47、講談社)／福井貞助『日本古典文学全集 伊勢物語』(昭47、小学館)／森本茂『伊勢物語全訳』(昭48、大学堂書店)／片桐洋一『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』(昭50、角川書店)／渡辺実『新潮日本古典集成 伊勢物語』(昭51、新潮社)／永井和子『全対訳日本古典新書 伊勢物語』(昭53、創英社)／阿部俊子『講談社学術文庫 伊勢物語全訳』(昭54、講談社)／石田穰二『角川文庫 新版伊勢物語』(昭54、角川書店)／中野幸一・春田裕之『伊勢物語全訳』(昭58、武蔵野書院)／由良琢郎『伊勢物語講説』(昭60、明治書院)／竹岡正夫『伊勢物語全評釈』(昭62、右文書院)／中野幸一『旺文社文庫 伊勢物語』(平2、旺文社)